

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

魔石の女王  
ヴェアトリア  
汚された淫囚妃

小説 瀧澤 春

挿絵 みたらいゆう

第一章	囚われの女王～THE FEMALE PRISONER	006
第二章	誘惑の女王～THE DEVILISH WOMAN	057
第三章	倒錯の女王～SLAVE IN PUBLIC	092
第四章	絶望の女王～THE REAL IS GONE TO NIGHTMARE	143
第五章	終焉の女王～THE END	188

## 登場人物紹介

Characters



### ヴェアトリア・ディア・ノートルダム

魔石を操る力で、ジークェン王国を統治する美しき女王。最愛の夫の遺志を継ぎ、国民を守る優しき賢女。

### ヴァルムス

ヴェアトリアの亡夫・アルスの弟。常に黒い噂がつきまとう人物で、王位を狙っている。

### ノルティア

フードを深く被った、謎の女。ヴァルムスの配下。

### トール

ヴェアトリアの身边を世話する小姓。侍女・ニナと婚約している。



それは紛れもない女魔術師の呪句だった。それと共に胎内で違和感が大きくなる。

(この感覚……一体、何……!!)

ヴェアトリアはその違和感——胎内に栓をされてしまったような、窮屈さを感じた。

だがそんな疑問もすぐに意識外へ押し込まれる。一度火のついた肉欲を押しとどめることは難しかった。独り寝の侘しさと寂しさをぶつけるかのように、女王は悦びの高みを目指して、腰をうねらせ続けた。胎内を抽送する女の指先に、身をゆっくり任せながら。

(またきちゃううう……いやらしく、叫んでしまう……ああ、嫌なのに……でもお、早くきてえつてえ、思っちゃううう……!)

ぬちやぬちや、くつちやくつちやと、一人の女になったヴェアトリアの痛々しいほどに充血したヴェアギナから、リズムカルで淫蕩なアンサンブルが響く——と。

「ハウ!!」

突然、女術士の指が引き抜かれた。

気をやるまで後もう少しだったにもかかわらず、それを迎え入れる前の突然の解放。女王は媚びるような眼差しをノルティアへ無意識に向け、正気に返って顔面蒼白になった。

「ああ違います……今のはっ、アア……わたくし、何てことを……っ!」

女魔術師が指挿入と同時に練り込んでくる魔力のせいだ。いつしか未亡人女王は魔術師のことをアルスであると思うようになっていたのだ。その魔力が快楽信号の遮断と共に解

けた今、女としての顔を憎むべき敵へ愚かしくも向けてしまったことに気付く。

「ご覧になりましたか、ヴェアルムス様。今の切なさで、媚びるような牝の顔をつ」

「あ、ああ……あなたは、卑怯よっ……それは、あなたの魔力のせい……」

女術士はヴェアトリアの膾肉を抉っていた指先をペろりと舐め、嫣然と嗤う。ヴェアトリアは自分が腰をうねらせてしまったことに思い至り、表情を痛々しく歪めた。

「くく、ああ。見させてもらった。ところで……どうだ、ノルティア。成功したか？」

篡奪者とその従者は意味深な目配せを交わしあう。

「もう完璧です。想像以上におま○こが素晴らしく、私自身も愉しんでしまいましたけど」

二人の国家篡奪者を前に、ヴェアトリアは碧眸に怯えの色をのぞかせた。

「女王様、私の魔力にて処女膜を再生させていただきました……」

「な、何ですってッ！」

ヴェアトリアはさつき感じた違和感の正体に合点がいく。しかしまさかそんなことまでできるとは。無限の可能性を持つ魔力の恐ろしさを、改めて思い知らされてしまう。

「という訳です義姉上。もちろん何のためにそんなことをしたか、分かりますかなっ？」

魔石の女王は奥歯をグツと噛みしめ、全身から血の気が引いていくのを感じた。

「私のモノになっていただきますぞ、義姉上……クククッ」

篡奪候はまるで赤子を拐かそうとするかのように、ベッドへ乗る。そしてズボンの合わ

せ目から、雄々しくそそり勃つ肉棒を取りだしてみせたのだ。

「穢らしいッ！ そのようなもの、見せないで……!!」

ドクドクと静脈が脈打ち、カリ太な亀頭先端へ木の根つこのように伸びる。陰囊は子どもの拳ほどはあるだろうか。肉棒の根元を覆う陰毛の絡み合いは胸の奥を痺れさせるほどの気色悪さ。おぞましい牡を剥きだした生殖器に、女王は吐き気を覚えた。

「義姉上……もう兄上のことなど考えないようにして差し上げますよ」

女王のムッチリした太股を義弟に掬われる。顎髭がうなじに擦り付けられ、全身におぞましい震えが奔った。背面座位で交わろうとする義姉弟。ヴァルムスは先端にかけてきつく捻れた肉棒を、グズグズにほぐれ、濡れそぼつ乙女の秘め所に押し付けてきた。

「ああつひいい、離しなさいっ、ひいむ。ヴァルムス……これ以上は、なりませんッ！」

粘膜同士が擦れて下肢に甘露な熱がジンジン沁み、女王は気後れした。

「今日よりヴェアトリア——お前は、生まれ変わるのだ。兄ではなく、私に従う従順な牝として。……今日はその記念すべき第一日目になるのだぞッ！」

下準備がされ、ぐつちより濡れそぼつ肉孔へ亀頭の王冠を食い込ませる。

「ファッ……ああ、むうぐううううう——ッ！」

ヴェアトリアは膣口に野太い体積の侵入を受け、思わず両腕を、背後の義弟の首に巻き付け仰け反る。肉砲身のめり込みが深くなれば、愛液が溢れて義弟の肉棒を濡らす。

(お、大きいいい……!!)

それはアルスのものでは感じたことがないほどの圧迫感だった。先端を押し付けられるだけで、女の中心が火だるまになってしまいそうな戦慄の戦慄が脳内に輝く。

ズリ、ズリ……ズズズズ。膣孔が大きく剝り開かれれば。碧瞳を剥きだし、女王は肩胛骨をグリグリと義弟の胸板に押し付けてしまう。

「ひいつ……あふうあッ……だ、だめえ、く、来るなアア……!!」

呼吸さえままならなくなる発作的な窮屈感が、女の四肢を荒波のように襲う。美しい女の身体が瘡おこりの発作に襲われるように被虐快に震えた。

「どうですか、義姉上。我が肉棒のお味は？ お気に召していただけましたかな？」

「ふ、ふざけないでえ——ヴァルムス……あなたのような者など、だ、誰が……ッ！」  
若き女王は首を回して、愚かしい義弟を睨め付けた。

男はにたりと、獸性を剥きだしにして口元をほころばせる。

「今はまだそれで結構……！ いや、むしろそうでなければ面白くないッ!!」

更にグリグリと媚肉孔は拡張作業を強いられ、その間も義弟による愛撫は全身に及ぶ。根元近くまで屹立がめり込めば、ヴェアトリアは氣勢を削がれたように眉を八の字に撓める。その女つぼい仕草に、ヴァルムスは顔を好色に弛めた。

「さあ、更に深くに行きますぞ！」

フン、と篡奪者は勃起に力を込めた。無情な突き上げに、魔力によって再生させられた脆弱な処女膜が引き裂かれる。意識が一瞬遠くなるほどの、力のうねりが襲いきた！

「あきひいいいいいいいいいい——ッ!!」

決して馴れることがないであろう稲妻に身体を袈裟に裂かれるような痛みが、虐悦となつて全身を灼いた。そのまま逞しい肉勃起は、贅肉のぎつしりと詰まった女の膺を割り開き、最奥をこれでもかとはかりに突き上げて止まる。

「ああ……うう……うう……あ、……うう……」

ヴェアトリアは弱々しく頭を振りながら、口の端からは涎を流した。

「フハハッ、どうです、義姉上！ 生涯二度目の処女を奪われた感想はッ？」

ヴェアトリアの太股にびっしり浮かびあがつた汗を、腿を掴んだままの手で潰す。そしてヴェアルムスは腰で円を描くように掻き回し始め、義姉の女肉をたつぷりと味わう。

「ぐううッ！ やめ……う、動かない……ひぎイイッ！」

アルスとの初夜の思い出は、痛みの記憶だ。しかし彼のためならと最後までして欲しいとヴェアトリアは言えた。あの時でさえ、処女喪失の痛みなどもう二度と体験したくないと思つたのだ。今それを篡奪者によつて蹂躪されるばかりか、淡い抽送を施される。

被虐感<sup>せじゆ</sup>は鋭い鎌のように連続して心臓に突き刺さり、胎内を屈辱的な激震が奔り抜けた。

「うぐう……ぐう、痛い……あうつくつ！」

痛み醒めやらぬ中。内臓を穿りだされるサディスティックな衝撃に、女王の涙腺は火のついた導火線のように燃え上がる。アルスの形に慣らされた膺は、それより一回りも大きい獣欲塊によつて更に拡張され、歪む——思い出が漂白される喪失感に喉が攀つた。

「ウウツ……ううツク！　ううムツ、うむう……つつつ」

母性の中心と云うべき子宮が、疲労と被虐の巣窟となつて女体を更に追いつめる。憎き義弟によつて背面座位で刺し貫かれ、ヴェアトリアの恥孔と肉槌の接合部分からは愛液とも先走りともつかない恥汗に混ざり、鮮血が掻きだされる。内腿がビリビリ痺れた。

（奪われてしまった……ツ、アルスのものだけだったものが……奪われて……）

処女膜が魔力によつて再現されたにすぎない紛い物だと分かっているにも、幼馴染に奪われた時の心の充足が、けだものめいた欲求の捌け口になつてしまったことに戦慄した。

夫のものしか導かないと思つていた大切な場所を、あの気色悪いほどの雄々しい獣根に蹂躪されてしまった。このまま膺が焼け爛れ腐り墮ちるのではないかという、おぞましい汚辱感がどす黒くのしかかる。

「う……うう……！」

それも相手はよりにもよつて義弟なのだ。痛みのせいであまく動けないでいるヴェアトリアの身体を後ろから抱きしめる仕草は、まるで女の肉体も魂も、自分のものだと宣告されていくような気持ちになり、アルスに対して後ろめたさを覚えずにはいられなかった。

「離しなさい……ううッ、そんなに強く……抱かないでっ！」

ヴェアトリアは、顔を悲壮感でくしゃくしゃにさせた。夫へ誓った貞操感の崩壊のショックからか。頭が真つ青に激み、何も考えられない。

「ご安心めされよ、義姉上。……いつまでも死んだ者を思うより、生者に目を向けなされ。欲望に忠実になるのですよ、さア！ 口づけを……義姉上ッ」

「い、いやです！ く、口づけはやめて！ ……お願い……やめ——むうッ!」

顎を掴まれ、後ろを無理矢理振り向かされながらの熱烈な口吻。

女王は生娘のように激しく抵抗した。処女を奪われ、それに比べればずっと榮なはずの口づけは、どうしてか交わりよりもずっと羞ずかしく、大切なものを踏み躪られてしまうようだ。《魔石の女王》の二つ名も、魔力が封じられてはただの飾り。魔石も扱えないただの女の身では、男への抵抗など高が知れている。

（気持ち悪い！ そんなに口の中を舐めないでッ、いやあ……涎くるう……ッ）

神へ唾棄するように、愛を嘲弄するように……親愛という言葉が踏み躪られていく悲壮感が、女王の心中に広がっていく——。

「んちゅ……ちゅぱっ……ンン、ンンぐいい……むむむンう……ッ！」

口蓋垂まで撫でられる乱雑なディープキス。女王の舌が、蛭のような義弟のそれと絡まれば思考ばかりか、心までもが掻き乱される。そしてヴァルムスの抱擁は、アルスのそれ

よりずっと力強かった。ギチギチと背骨が軋るほどで、痛みさえ伴う。だがそれだけ強く存在を感じることができてしまうのだ。

「んんう、ちゆうううう……ンッ……むふううううっ！」

更に唇を奪われながら、乳房をこつてりと揉まれる。ヴァルムスの手はこなれた動きで優しい。しかしそれは女性を愛するためではなく、弄ぶための淫戯にすぎないのだ。そうと分かっているのに、肉体は甘えてしまう。そして蛙のように大きく開かれていた脚は依然として義弟に押さえられながら、弱電流を流されているようにヒクついた。

（うああ……おっぱいが、ああ熱く……どどん熱くなつてきちゃううっ）

形崩れのないツンと生意気な乳房をねちっこく捏ねられれば、おぞましい触感に全身から生汗が噴く。ドレスごし、優美な女体曲線が剥きだしになる。乳首を摘まれれば、鼻にかかった誘美な声が、女王の肉体についた甘い脂肪が、フルフルと優美な波紋をもたらす。むふつ、むふつと呼気が何度も詰まり、それが口吻を通して、ヴァルムスの口腔へと吸い込まれてしまう。奪われるのは唇や、舌先だけではない。声さえも籠絡の憂き目にあうのだ。女王の身体は骨から肉を削ぎ落とされるように、心と繋がる部分を容赦なく剥ぎ取られ、奈落へと貶められていく。

「ちゆるる……ちゅぐうう……ちゅ……ン、んううう……っ!!!」

女王は目を伏せ、己の不甲斐なさを呪う。



しかしその悩ましげな姿は、あまりに長いキスのために羞じらいを覚えたのだろうか、むしろエロティックな印象となつて、未亡人との交わりの背徳快感を増幅させる。

(ああ……アルス……アルスッ！ こんな情けない私を許して……!!)

亡き夫へ詫びを入れながら、舌を吸われ、脂臭い唾液を嚙えんか下させられてしまう媚態の未亡人。菌莖や菌の裏、女王は口腔を満遍なくヴァルムスに蹂躪じゅうりんされ続け、解放されるや否や。首をガツクリと折ってしまう。それほど憔悴の程度はひどいのだ。

「甘美でしたぞ、姉上の唾液は……。完璧な女性というのは体液さえ美味ですな。それにキスをしている間も、私のおちんぼをおいしそうに食い締めて。相性がいいのですなッ」  
「ウソです！ 誰があなたに愛情などとツ、馬鹿にするのもいい加減になさい！」

首を激しく振るヴェアトリア。ヴァルムスは義姉の顔を掴むと、真剣な眼差しでその困惑を射ぬいた。女王の唇がかすかに半開きになる。

「んはあああッ……！」

パアン、と一度激しくヴァルムスは腰を突き上げてきた。子宮口を撃ち抜く乱撃に、胃袋がグウウンと迫りだし、それが悪夢の連鎖となつて襲の蠢動までも促進してしまう。憎むべき相手の肉棒を歓迎するかのようには、愛汁がどんどんと搾り取られていく。

「んはあ、ダメエエ、奥う、叩いちや、ひいひい——っ!!」

鋼鉄のような硬さが最奥を突き上げると、内臓が全てひっくり返されるようだ。それに

伴って容赦のない嘔吐感が女王の細身へ鞭を繰りだす。

「ううぐう……ぐう、う、ツ！」

「義姉上つ、義姉上のおま〇こは宝ですぞ。我が国の宝……オオ、最高ですぞッ！」

潔癖な女王は義姉上と呼ばれながら犯されれば犯されるほど、先王に対しての後ろめたさに追い回され、ヴァルムスの肉棒を力強く締め上げることが理解していた。

だからこそ不埒な義弟はわざと大きく義姉上と呼ばわり、快楽を享受し続けるのだ。

「ンハア！　ンヌウ……むうがッ、んはあつつ、んはああああつつ！」

パンパンパン！　ヴェアトリアの恥骨と、裏切りの義弟のそれとがキスをするようにぶつかりあう。バズッ、ズズウウンと女孔を錬磨して巨大体積の肉塊が押し寄せれば、膣粘膜は石油のように燃え上がり、我を忘れるような快美の神髓を叩き付けられてしまう。

（こんなの……ヴァルムスのは、ただ大きいだけで、く、苦しいだけなのに……！）

最奥を激しく叩かれれば、まるで喉に食い込んできたかのような擬似感覚に襲われて、窒息しそうになる。それほどまでに篡奪者の勃起の存在感は大きく、そして矮小なものしか受け止めてこなかった女の膣にとっては脅威そのものだった。

グヂュッ、ヂュグッ、ズブブッ！　ザラザラとしたGスポットに彫刻刀を入れられるように強健な亀頭が何度も膣壁を穿る。それが胸弄りと共鳴し、万華鏡の如き快楽の七色を膣中に飛び散らせ、禁欲的な女を官能の淵へと引きずり込めんと毒牙を立てた。

して重厚感がある。義弟の逸物で散々扱られた記憶が甦れば、カアツと脳裏が紅く灼けた。  
(ウソ……こんなものを入れると言うの、そんなこと……あああつ！)

ヴェアトリアは頭からサーアアツと血の気が引くのを感じる。麗しき囚妃は喉を引きつらせ、艶やかな唇からヒイイ、と奇声を漏らした。

(こ、こんな大きいもの……は、入る訳ない……！)

ノルティアは目隠しをしたヴェアトリアにもその大きさや長さが分かるように、散々鞭で打った臀肉へ雄々しい擬似逸物を擦り付ける。排泄孔に挿れられる背徳感が、その形状が誰のものかを、女王の精神に突きつける。膺褻が過剰に反応し、かつての快美を反芻した。

(こ、この長さ……ああ、この大きさ……ま、まさか……この張り型……！)

瞳孔がキュツと収斂すれば。おぞましい太さとカリの開き具合に背筋が栗立った。

「ふふ。どうやら氣付いたようね。これはヴァルムス様のものを象つたのよ？」

その一言にヴェアトリアの恐怖は最高潮に達した。魔力により再生させられてしまった処女を奪った、あの憎きもの。それが今度は秘匿されるべき禁忌までも犯そうと言うのだ。

「いやあ！ そ、そんなのはイヤッ！」

もしかしたらお尻の孔は裂けてしまうかもしれない——嫌、こんな大きなものでは絶対に引き裂かれてしまう。ヴェアトリアは必死に声を絞った。だが拘束され、熱鐵責めと鞭



臂孔を犯されてしまえば、自分の身体がヴァルムスのもので墮落しそうな恐怖があった。心はこんなにも拒絶しているのに。媚鬢肉をほぐされているような、蕩けてしまいそうな粘っこい悦びが、アヌスの入り口を突かれるだけで漣のように押し寄せて止まらない。

「し、……死ぬう……！　ううっ、も、もうっ……や、やめ………お願いいい……ッ」  
女王はアヌスに感じる圧倒的な力強さに、床に爪を立てて足掻いた。

「ソニアッ……ハウウウウン……！」

窮屈になればなるほど、秘門は激しく蠢動を繰り返し、じくじくと愛汁を分泌して止まらない。腿を濡らす液は白く泡立ち、甘露さを散布する。

「フフフ……いいわアッ！　どんだんほぐされてきたみたい……」

下肢がビリビリと痺れた。陰部を中心に、何もないうことへの切なさで満ちていく。

「だ、だめええ——　あひやあああああああアッ!!」

グリグリと鬢をかき分けるようにして、ノルティアが秘肉へ三本の指を差し込んできたのだ。媚肉の中で空蠕動を何度も繰り返していた、いやらしい鬢孔から本気汁が溢れる。

「ひいひい、あふあつ……おんむう……むうは、ひいひいいくうううッ……！」

媚肉玩弄と腸口圧迫とが業火に灼かれるような凄まじい相乗効果を生みだし、女王の身体を撃ち抜けば——にゅっぷっ……と指をすぐに引き抜かれてしまう。

「喉が渴いたんじゃない？」

ノルティアは膺挿入していた指を、女王の口に運べば。指を舐めることを強いた。

「あうう……うむ……ぺろっ……んっ……むうふうっ……んちゅっ、ぺちゃ……ぺちゃ……」  
飲精欲求に突き動かされるように自分の本気汁を舐め取れば、惨めさが胃の腑を灼く。魂さえ消えてしまいそうな、昇天の悦びは束の間——すぐ奈落へ身体が堕ち込むような虚無感が到来した。

（アルスアルスっ！ 助けて、わたしい変わってしまったう！ アルスの知らない、わたしになつちやうう……助けてっ、アルスウツウウウ——ッ！）

肛姦の大洗礼に、女王は一人の女としての喜びの絶望に堕ちていく。そしてまたあの呪句が狂乱の中で新しく開拓されたアヌスから侵入し、贅肉にまで沁みてくる。

『ヴェアトリア——お前は、生まれ変わるのだ。兄ではなく、私に従う従順な牝として』  
それは憎き篡奪者が二度目の処女を奪う前に放った言葉。

（アルスっ！ ああっ……わらひいのアルスッ！）

口を締め、目を瞑る。ヴェアトリアは最愛の人の姿を思いだそうとする。アルスとの思い出で呪句を負かそうとした。しかしアルスを失って数年久しぶりにこの身に絶頂を覚え、そして肉悦を反芻させた義弟の雄々しき砲身の織りなす倒錯の悦楽が、電撃となって迸る。  
（アルス……アルス……ど、どこ……どこなの……？）

最愛の人の姿はほとんど見えなくなっていた。意識の底を洗って、その残滓を見つけて

も、瞬きをしている間にどこかに消えてしまう——ぬか喜びと絶望のつづら折りに、哀しみが逼迫する心を更に追いつめていくのだ。

『ヴェアトリア——お前は、生まれ変わるのだ。兄ではなく、私に従う従順な牝として』  
もう一度脳内に直接染み込んでくる篡奪者の言葉。身体が真つ二つに断ち割られるのではないかという衝撃に、女王は獣のようなくぐもつた声を上げる。

(いや……聞きたくない！　だ、誰がヴァルムスのような……よ、ようなあ……——)  
義弟の呪句が頭を攪拌し、一瞬気が遠くなつたかと思えば、アヌスの方から口を開く。  
グウツ！　全身に淫らかな魔力が渦巻けば、張り型の先端が臀粘膜を穿るように埋まつた。

「おおおおおッ……おお、おおおおお——ッ!!」

脆弱な粘膜質がメリメリと軋みながら剥り抜かれれば、挿入快感に蕩けていた瞳が正気を取り戻す。眦が裂けんばかりに見開いた瞳は、大きく揺らいでいた。

「やめえ……はああ……！　ぬ、抜いてえ……こんな太いの、無理……イヤ、はうう！」  
グジュグジュと粟立つた肉汁が膣から溢れて、すべやかな大腿部を覆う真つ白なストッキングを穢す。そしてさつきまでささやかな窄まりだったものは、今や大きな円となつて、義弟の肉棒を象つたデイルドーをおいしそうに呑んでいた。

「深い……はああつ、どんどん深く……はいつてえ……はああああ……ッ！」  
(こわれちゃうう……、壊されちゃううウウウ……ッ！)

ヴェアトリアは肛門から駆け上ってくる絶望の足音に戦慄しながら、今まで床に着いていた両膝を持ち上げた。クラウチングスタートのように、腰を高々と持ち上げる。

「うむむむ……むむむつ！ ムグツ……ツツツンンンウ」

異物挿入の衝撃に身体が勝手に動いてしまう。ガーターで吊られた白のストッキングは汗を吸い過ぎて皺だらけに、内股に浮かぶ健は絶えず痙攣を繰り返した。

ズツ、ズブズツ……ズブズブツ。

先端が入れば、括約筋が蠢動して野太い張り型をグビグビ呑み込む。その度に拡張され、引き延ばされる腸粘膜が戦慄し、込み上げてくる吐き気で目眩した。しかし野太い張り型は排泄孔に咀嚼されるかのようにどんどんと吸い込まれていく。腸挿入が深まれば深まるほど、ヒクつく髮粘膜の輪からはじよぼじよぼぼ……と甘露な蜜が零れた。

「ひいひいっ、ひいひい……すぐくう……はいってえええくるのおおツ……！」

胃袋がグイッと押し上げられた瞬間、胸の中で歓喜の光が満ち溢れて止まらない。

心が決壊してしまつたかのような喜びの奔流が、ありとあらゆるものを薙ぎ倒した。

「あつ、あううう……あうう……深いい、ふかいいううううううツ——！！」

張り型が排泄器官へ完全に突入したことで、悦楽が火を噴いて肉体を灼く。

「ひいひいっああああああああんンンンウウ！」

ヴェアトリアの身心は激しい躁状態に襲われた。世界が変革したようだ。あり得ないほ

どの大きな異物の前に凄まじい排泄感が胃の中で煮え練り返り、ズキズキッと粘膜が甘い疼きを発する。半ば開いた口からは唾液を零し、身体は一定間隔で痙攣を繰り返す。

「嘘だろおお……っ、あんな、でけえもん……すげえええ……」

「お、おいマジかよ……っ、どんどん入っつていきやがるぜえ……！」

「きちやうう！ はあああ……入っつて、ずぶずぶ奥に、く、苦しいい……！」

国民達は息を飲む。目の前でアヌスを堀られ、愉悅に沈んでいく女。しかしその姿は不思議と、痴女の一言で斬り捨てられない何かがあった。ただの売春婦や淫売とは、嬌声や、乳房、恥肉、全ての点において一線を画している——高貴な色香が満ち溢れ、崇高な芸術品のような気品があるのだ。

（訳わかんなくなっつちやう。お尻、搔き混ぜられたら、全部、全部わかんなくなろう！）

罵られているのか、軽蔑されているのか、尊敬されているのか、忌避されているのか——だがもうどれでも構わない。何をあれほどまでに嫌悪し、不快感を剥きだしにしていたかも分からなくなる。

「うっつっつはあっつっ……ッ」

口を割る喜悅。ヴェアトリアの目の前が真っ赤に染まる——絶頂ッ！

押し寄せる魔悅の洗礼は女王のか弱い肉体に、休むいとまを与えない。

「や、やすませえてえッ！ 大きすぎるのく、くるっちやう……」

「ふん、こんなことで感じてしまっているの、この変態めッ」

ノルティアの言葉責めに肉孔がキュツと窄まり、張り型をより強く締め上げてしまう。「変態じゃない……わたくしは、変態なんかじゃ……ない、うう、ふわうう……！」

ゴリゴリと義弟の擬似男根が激しいピストンで排泄孔を蹂躪した。ディルドーは食い込み、内臓が引つかき回される。生理反応の逆流に内臓が引きずりだされそうだ。

「イイイイッ！ ひいいい、ほじられてえ、だめえなのに、感じるううう！」

尻の括約筋が裂かれ、入り口が繰り広げられて意識が燃え上がる。お腹いっぱいになる圧迫感、胎内を、排泄孔をそして内臓の処女まで義弟に捧げてしまうようなおぞまじさが、肉悦によって溶かされていく。魔力は高まり、悦びに満ちた非力な肉体を蝕んでやまない。

「そんなにコレが好きなの！ この変態ッ！」

グジュツ！ ジュブツ！ ズブツ！ ズボボボツ！

腸液を掻きだされ、快美の炎が腸腔内で激しく炸裂した。まるで衆人環視の中、排泄をしているような歪んだ汚辱的な快美に、身体中の粘膜という粘膜が火を噴く。巨大な張り型に腰が引きずられ、紐がほどかれ前開きになったドレスがべらべらと揺れ、まるびでている完熟果実を思わせる乳房が、重々しい存在感を誇って揺れる。

「好き——ちがうう！ 好きじゃない、すきじゃあつ……ううひ、ああっウウ！」

排泄と流入とが壮絶なコントラストを生みだし、汚辱快楽にのたうつ美姫を奈落へ追い

落とす。背徳感は気分昂揚を生み、女王を倒錯的な栄華へ導く。

「なら認めるのね？ あなたがヴァルムス様を暗殺しようとした、変態暗殺者なのね!!」

更に猛烈なピストンを仕掛ける女術士。張り型の冷徹さが腸を切り裂くように奥へ押し入る。何度抽送されても括約筋がぎゅうぎゅうと食い締めるから、いつまでたっても狂おしいほどの圧迫感がなくならず、呼吸困難に陥りそうだ。

「は、ハイイッ！ わ、わたくしがあつ、ぐううつ！ この変態マゾなヴェアトリアが、ヴァルムス様を……ううーむ……ッ、殺そうとつ、しましいつあひいッ！」

罪刑にかけられてしまうことさえ、今のヴェアトリアにとつては快感だ。国民を前に断罪される恐怖が、官能を蕩けさせた。目隠しをしていることが心理的に作用する。自分の正体はどうやつても分からないのだから、どれだけ卑猥な言葉を用いてもバレない——女王の籐たがは外れ、魔力によつて擬製されたマゾ快感の蕾がほころびを見せる。

「ひいひい……やめへえつ……あきやあああああつ！」

まるで女王は瘡にでも襲われたように、髪を捌けさせた。

「ヴェアトリア？ 偶然ねえ。この国の女王もヴェアトリアと言うのよッ……！」

民衆は騒然とした。彼らの間では、目隠しをされた女の姿がどこかノートルダム王家の女王ヴェアトリアに似ているということが言われ始めていたのだ。

（ど、どうしようバレちゃう、……変態マゾ女が女王様だつてバレちゃう！）

過ぎつた肝の冷える恐怖。しかし快楽は正常な意識を黒く塗り潰していく。

(いけないのにい、みんなあにい、バレてしまってもいい……って思っちゃううつつ！  
そうすればみんなもつとわたくしにひどいこと言ってくれるって思っちゃう！)

色っぽく柳眉を撓ませ、《魔石の女王》は忍び寄る紅玉の魔力に身も心も抑留される。

「わ、わたくし……わたくしはあっ！」

どれが正しくて、どれが間違っているのか——何も分からなくなる。意識が快楽という濁流に呑み込まれ、為す術なく身体の奥底で渦巻いていた欲望が溢れ返った。

穢されたい、嘲弄されたい、苛んで欲しい——倒錯の悦びが意識へ交じり、ヴェアトリアの口を悪夢が突き上げた。

「はいいい！ わ、わたくしはつ、ヴェアトリアといいますッ！ この国の女王のヴェアトリアですつ、ひゃああん、ああんお尻、だめえええ……!!」

目隠しをされた女王は、喉笛が裂けんばかりに告白した。今まで我慢していた秘密の吐露に安心したのか、全身から力がドツと抜ける。

(言っちゃった！ 自分で、正体ばらして……もうだめよ……ああ、おしまいよ)

女王は自分から正体を吐露すれば、民衆の喧噪は怒りを孕んだものに変わる。

「嘘つくなっ！ 女王様がそんな訳ないだろうっ！」

すると、女王は身体に堅く重いものが掠めるのを感じた。それは石だった。あまりの突

然の投石による痛感に、きゃつと悲鳴を上げる女王。魔石の女王の發達著しいミルク肌の美巨乳を的に、次々と石が脂肪肉に食い込み、赤い痣を作る。

「いやああ……いしいつ！ おつぱいい、ダメエエ！ 感じちゃう、感じすぎちゃうう！」  
真つ赤に灼けた石を肌へねじ込まれるような激痛が奔るが、女王を狂悦に染め上げる。

「何あんたふざけたこと言ってるんだ、変態女アツ」

自分達が尊敬する女王陛下の名を穢した変態女へ、一部の観衆は罵倒と石を投げ始めた。ヴェアトリアは豊潤な柔肉へ石が当たるほど、快美の鍬が突き刺さる快感に煩悶してしまう。子壺が快感の炎に灼かれ、ふしだらでおぞましい幸福を味わってしまう。

（ああ、みんな……わたしをそんなに慕ってくれるの……？）

国民の女王ヴェアトリア擁護の声は、あまりに鮮烈に女王の耳を打った。胸の中がほっくりと温かな感触に包まれる。自分はまだこんなにも多くの国民に支持されているという事実が胸が一瞬高鳴るものの、結局恥知らずに身悶え、国民の想いを躪つてしまう罪悪感で心が軋んだ。飛礫の一つ一つに込められた女王養護の心が、痛み以上に心を潰す。

「この者は容疑者なのだ、衛兵……石を投げた者を拘束せよ」

（逃げて……みんなあ逃げてえ！）

マゾ悦楽という名の蜘蛛の糸に搦め捕られてしまったヴェアトリアは、兵士に拘束される国民の気配を感じることしかできない。今ここで全てをさらけだし命令を下せば、衛兵

達は動きを止めるかもしれない。しかし官能の猛毒が身体に忍び、動けなかった。

(ああ……そんな。なんてわたしは、罪深いの……国民を守れず、そればかりか……お尻で気持ちよくなってしまうなんてええええ………つ)

だがそんな思考をたたき割るように、張り型が更に侵攻してくる。もう十分奥底まで埋まっているのに、限界を超えた更なる深部への突入で、目の前に白光が幾つも瞬く。

「あああああああッ！ お尻い、ほじらないでえ、おねがあひゃあいいい、ういい!!」  
バチンッ！ と臀肉をノルティアが張り、同時に張り型を高貴なアヌスへ完全に埋める。

「深いっ、あははははうう………ふ、深あっ、すぎい………ムムンン！」  
焼け付くような痛みに、女王はマゾ昂奮を最高潮に高めた。

(ももうう、だめ………気持ちよすぎちゃうううう！ 狂って死んじゃうううよおおおッ!!)  
ヴェアトリアは目隠しごしに狂喜の涙を流して、上体を仰け反らせた。頬を伝う涙が、涎と溶け合い、淫らな美貌を国民に曝す。

「解放してあげるわ………さあ、存分に狂いなさい………女王陛下………」

魔術師は女王の腕の拘束具を解いた。ヴェアトリアは一気に腕を床に着いて息を荒げる。  
(解放してくれる………わあたしい………両手、つ、つ、使つてえ、い、いの………?)

ヴェアトリアはヒイヒイと呼吸を引きつらせながら、自分の水風船のような弾力の乳房を自分で力一杯握りしめる。指の隙間から肉が溢れ、脂肪が妖しく歪んだ。





「あむむむむうううう……!!」

突然頭の中に煌めいた強い悦楽の存在に、危うくヴェアトリアは嬌声を上げそうになる。身体に侵入した媚液は蠟のようにねっとり細胞に絡み付き、搔痒感と痛痒感の間に潜む愉悦を、はつきりと意識させる。

「ふあっ！ ツ……あつむう……う……あんふうっ……むうっ……ッ！」

もしこれで乳首を穿られたらどうなってしまうのか。考えるだけで、ヴェアトリアは恐ろしさに背筋が寒くなった。だが理性とは裏腹に完熟の豊肢は、淫らな呼吸をくすぐられ、無意識に快感の享受を望むようになっていた。大の字に固定されたまま胸を無意識にも突きだし、触手から受け取る快感をもっと強く得たいと主張してしまう。

（ああ、か、身体が動いちやう……もつと欲しいと言つて……刺激が欲しいつて……!）

女王は肌が蒸し灼かれる感覚に耐えきれず身を揉んだ。僅かな動きでも布地の少ないドレスには大きく影響し、ハーフカップから優美な乳房が零れ落ちそうになる。

「まさか、女王様……感じ始めているのではないのか？」

「姫様が身体をよじつてらっしゃる……っ」

国民達の声を拡声器ごしに聞いているように、ヴェアトリアの耳朶を強く打つ。聴覚を通し、そして触感をくぐり、身体の触みが理性をゆっくり曇らせる。

（国民が見てる？ そんなじつと見られたら……か、身体がどんどん熱くなる!）

国民の視線が見えない手となり、触手とは違う、魂をほぐされるような感覚を生む。

産毛がチリチリと灼き焦げていく羞恥心が生まれ、一際激しく膺が蠢動して昂奮が急上昇する。身体全体に火がついたかと思うほどの放熱感で、胎内が燃え上がった。

「あふうっ……あんっ……んっあっ！」

官能の雫が子宮に落ちては、全身をまたとない好色な戦慄が襲う。

（諦めてはだめ……。諦めたら全ておしまい……。うう……。皆、わたしのことを信じてくれているのよ……。ヴェアトリア……。がんばってえ……。！）

だが。許されざる被虐の悦びは、ヴェアトリアの精神を炙るようにジワジワと侵していた。既にショーツはぐつちよりと濡れ、腿を伝い落ちる愛蜜は夥しい。ドレスにも染みがつき、剥きだした太股は紅く火照り、噴きだす汗香に淫らなコーティングを受けていた。

「辛いなら辛とおっしゃればいいのです……。正直になるのですよ、慾望にっ」

「よ、欲望なんて……。！ わたくしの望みはただ国民が無事であることだけですわっ！」  
煌びやかなドレスに身を包んだ女王は、国民の前で精一杯気丈に振る舞う。

しかしその実。窮屈なドレスを脱ぎ捨て、全てをさらけだした時の昂奮を思っては密かに目を輝かせ、勃起乳首を弄られた時の激悦に期待に胸を膨らませてしまうのだ。

「ふあっ！ 熱いっ！ 身体……。あむむっ！ むふうううううっ」

身体の中を貪る媚液の流動感が一層烈しくなり、女王の嫌悪する官能の発露を促す。

(耐えないと……。うう、負けてはいけ……。ないい……。ああ、熱くてどうにかなりそうっ)  
国民を守ろうとする潔白の精神はのぼせ、女王の清廉な意志は大荒れの海の波間にあって必死に抗う小舟だ。いつ淫乱な渦潮に飲まれ、碎かれてもおかしくない。

「意外と頑張るのね。……。ふふふ、でも、もう飽きたわ！ 遊びは終わりにしましょう。魔族の栄光のため。女王を牝へ墮としてしまえっ、魔獣よッ！」

グルウウツ、ウググググッ！

女術士の言葉を悦ぶように、魔獣は何物をも飲み込んでしまいそうな大きな口を、ヴェアトリアに向けた。深淵な闇を見せつけられ、女王の心の中に言いしれぬ不安が生まれる。(な、何ですって……。い、今までの遊びだと言うの……。!?)

女王は魂から冷えていく恐怖を覚えた。今でこそ意志を繋ぎ止めることで精一杯なのだ。それが今より烈しくなる。それ以上のことはヴェアトリアは考えたくなかった。

一方魔獣の触手は素肌ではなく、ハーフカップのドレス生地を塗り込め始める。ジュツ、ジュジュジュツ……。突然ハーフカップが泡立てば、泡の一粒一粒がプラズマを引き起こし、バチバチツと電熱が肌を擦過した。

「ひいあああつ、あつうう……。ううう、と、溶けふう……。溶けてふうう……。!？」

胸部生地が泡に覆われればどんどん熔けていく。押し込められていた巨乳が、その肉感的な輪郭に泡をまつわせながらまろびでた。釣鐘乳房は汗と、溶かされたドレスの残骸が

まわりつき、淫らな様相を呈しながら、ゆつくりと下乳肉を撓ませていた。国民の前へ露わになる豊満な乳肉——乳首に括り付けられている紅玉が妖しく輝いている。

「お、おい女王様……乳首になんかつけてるぞっ!!」

「だめっ! ああ、み、見ないで……っ、見ては……見てはだめええ——ッ!」

女王は美しいブロンドを振りたくり、国民達へ懇願の想いを吐露した。しかし国民達はヴェアトリアの曝された乳首の美しさと、括り付けられたリングの既視感に騒ぎだす。

(お、お願い……誰も、誰も気付かないでえ……っ)

だが無情にも国民の言葉が、氷の刃となつて心臓を射ぬいてしまう。

「あれつて、この前……広場で尋問されてたやつと同じじゃないのか!？」

「まさか……。それじゃあ、あのヨガつてた変態は本物の女王様だったのかッ!」

誰かがそれに気付けば、あつという間にそのことが広がっていく。女王は心臓が止まつてしまふようなほどのショックに叩きのめされ、美貌から血の気を引かせた。

「あ、ああ……。し、知られてしまった……と、とうとう……っ」

驚嘆と軽蔑の折り混ざつた視線に、女王は赤子のように怯えることしかできない。

やがてぷっくり膨らんだ乳輪をサワサワと刺激し続けていた赤黒触手が動きだす。マニユピレーターのように器用に蠢動すれば、触手は乳首に絡んでいた紅玉のリングに絡み付く。ただ金具に絡み付くだけで、倦怠感が身体にねつとりと落ちる。

(ひつぱるの……？ だ、だめえ！ 今そんなことされたら……っ)

しかし無情に絡み付く触手は凄まじい乱暴さで、そのリングを前方に引つ張った。

グウウウウウツ……！ 釣鐘乳房が静脈を透けさせるほどに引き延ばされ、パン生地のように捏ねられてしまう。その瞬間、今まで抑えていた灼けるよう嬌声が口から溢れた。

「ち、ちくひい……だ、だめえ、ひつぱっちゃ、あっきゃああああああ——っ!!」  
乳房から脳天に向かつて被虐の爪牙が引き裂き、女王はそれだけで一気にアクメに達せられてしまう。全身の血がドクリと脈打つ感覚に、意識は真つ赤に染まる。

「ひぎい！ あがあっ！ だ、だめえ……ひつぱるのお、ちぎれひやうう……あひい！」  
女王の四肢を大の字に拘束している触手も蠢き始め、腕を、長脚を手折らんばかりの強さで締め上げてくる。崩壊さえ感じさせる強引さが、四肢を襲う。

しかし。紅玉はヴェアトリアの身に降りかかるあらゆる痛みを狂楽へと変える。痛感のために冷や汗を流しても、それが胸元へ吸い込まれていく時には、既に性感を燃やす悦楽に変わっているのだ。

「あひ、ヒッグウ！ き、きつうう……あぐうい、いひやい、のひい、いいい！」

被虐の魔悦が全身で氾濫する。神経をハンマーで荒々しく殴られるような被虐のスパークに、呂律が回らなくなった。

「だ、だめえええあああ——っ!! ひい、ひいぎれ……あむうううう——ッ!!!」



乳首はますます前方に向かって痛々しいほどに引つ張られ続ける。

「ふあつ、ちぎれえつ、あつひやあああああああ〜っ!!」

激しい肉悦に意識は激しく昂奮し、恥辱に目眩を起こすことも、痛みに気を失うこともできない。決して身心が休むことを許さない炸裂感が、間断なく脳髓にこだました。

「……こんな、あ、あさましいい……いいい……!!」

乳房を引つ張る力が錐のように、何度となく精神の中枢に突き刺さり悩乱する。

「……ひやあむううっ!!」

更に野太い触手が口腔へ無理矢理押し込まれ、頭の中が真っ白に灼けた。息が詰まり、瞳に涙が滲んだ。口腔粘膜をズリズリッと引きずられ、食道をぐりぐり刳り抜くように広げられれば、舌が痙攣を起こした。

（すごい！ 身体全部、ぶつといい、お肉がみっちりつてえ……すごい!!）

肉欲に征服されるような感覚が、惨劇のマゾヒズムを更に燃え上がらせる。

乳房がもぎ取られる暴虐の愉悦に曝され、被虐が呼び覚ます極彩色の閃光が迸る。

「むうぐっ！ むあうぐうっ……むちゅっ……ぢゅうううっ……あむううう!!」

何度も嗚咽を漏らし、口腔は触手を追いだそうとする。しかしその舌の動きは触手を押しだそうとするよりは、舐めしゃぶっているようにしか見えなかった。唾液分泌がどんどん量を増していき、口の端から零れればネットリ顎を汚した。

「ふかあぁっ……あむうううっ……むごっごおごお……ッ！」

窒息感に小鼻をびくびくと膨らませ、ヴェアトリアは苦しそうに藻掻く。

被虐に囚われる女王の姿は、魔獣の嗜虐性を沸々と刺激していく。更に粘膜が掘り起こされるように乱暴にねじ込まれれば、喉奥を穿たれる。目の前に赤い閃光が瞬く。

「あぐぐぐっ！ むぐぐあぁっ——！！」

口腔粘膜を割く触手は、身体の奥深くまで一度も止まることなく駆け下った。

粘膜と触手のゴツゴツした表面とが擦過しあい、頭の中で灼け付く快美が爆ぜる。そして一直線に消化器官にまで到達すると、無数の小さな触手へと分岐し、脆弱な胃粘膜に次々と触手の先端がくつつく。その度に粘膜が炙られるような痛痒感が骨伝導で閃くのだ。

（な、何!? 何をしようと言うの……?）

ズズズズ……！ 小触手群がヴェアトリアの臓器の壁に吸い付けば、一気に吸飲行動を開始する。神経が圧迫され、バチバチツツと火花が爆ぜる感触に仰け反ってしまう。

「吸わぁうう……!! うううっ、あむうううう……んぼおおおおおおおおお!!!」

開きつ放しの口からは涎がだらだらと漏れ、宝石を思わせる瞳孔は無茶苦茶に開閉を繰り返す。可憐な唇から飛びでた触手はまるで産声を上げるように、うねり続けていた。

（魔力があぁ……わたくしの魔力がす、吸われてうううううう……!!）

小型触手の問答無用の強吸飲で、純度の高いヴェアトリアの魔力を飲み干され、激しく

えずいてしまう。まるで希望がどんどん闇に包まれ、やがて消えていくようだ。

（いやああ！ 奪われてるのに……魔力吸われてるのに、き、気持ちよくなつちふう……）

それは酸欠になって意識を失う、何もかもがどうでもよくなる快美の数珠繋ぎだった。いつ終わると知れない、凶暴な悦びの充満。

そして魔力の喪失はヴェアトリアの完全敗北を意味するだけでなく、〈魔石の女王〉の終焉をも意味していた。最愛の人の肉体だけでなく、魂との繋がりをも失い、女王に残されたのは、マゾヒズムな快感を享受する淫乱な身体だけになってしまう。

「わたひい、おひやあつ、おひやあつひつこうう、なつひやああああ……!!」

埋め込まれる触手が動く度、胎内で弾ける紅い稲妻。それが魔力吸引で疼く子宮を、マゾヒズムの炎で焼き尽くす。吸引の力が胎内を揺るがす度、両太股が激しく痙攣、連鎖的に尿道が戦慄すれば――。

（ああああ……！ そんな今はだめえ……きちゃ、いけないい……い、いけないのに！！）

下腹に起きた排泄衝動に、括約筋を締めて激しい生理衝動を食い止めようとする。

しかし釣鐘型の巨乳の先端紅玉へと絡み付く触手が房肉を振り上げれば、被虐の紅蓮ぐれんがヴェアトリアの精神をぐちゃぐちゃに踏み躪った。腹筋の力は立ち消えてしまう。

「あああああ………つ」

腹筋に力を入れる度、全身が燃えるような波紋が飛び散り、やがて――。

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で  
好評  
発売中



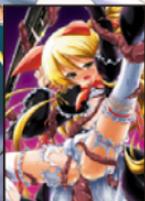
## ピルグリムメイデンⅡ

白装の騎士

「小説：狩野景 / 挿絵：ぼち。」

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!  
ちよびのマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

全国書店で  
好評  
発売中



## BLANGEEL

「小説：夜士郎 / 原作挿絵：渡瀬行人」

吸血姫と狩猟者二人の影が闇を斬る  
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画  
が待望のノベライズ!!

「カリスイーター」  
呪詛喰らい師  
「小説：蒼井村正 / 挿絵：或千せねか」



2010 4/30  
発売予定!!



セクシー退魔師が荒ぶる神様をエッチな  
ご奉仕で鎮める伝奇アクション!

既刊LINEUP  
全国書店で好評発売中

- 仙銀字艶戦姫 / ノナガ! ①～③
- 借金お嬢クリス ①～②
- 無慈悲の姫騎士が4Mに巨貪めたようです
- 思春期なアダム ①～②
- プリンセスバレーン! 交錯する美姫と魔姫
- ピルグリムメイデン 深紅の淫礼聖女
- 阿蘭(帝都)少女探偵団 赤い謀略を撃て!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

